

江戸庶民の旅と江東③

江戸っ子に人気だった大山詣

江東区深川江戸資料館

1. 大山と大山詣

大山は、神奈川県伊勢原市にあります。またの名をあふり山と言い、雨降山または阿夫利山と書きます。山麓と平野部の人々からは雨乞いに靈験のある山として信仰されてきました。また、正三角形に近い秀麗な山容は、相模・武蔵・安房・上総から見る事が出来、漁師たちにとっては漁場や航路の目印であったため、やはり信仰の対象としてきました。その他、地域によっては、一人前に成長したことを祝う初山参りの習俗や死者供養の茶湯寺参りなどもあり、或いは、修験者の道場の拠点になるなど、古来より靈山としての特徴を持つ山として崇められてきました。そして、江戸時代に入ると、大山詣として広く知られるようになり、信仰と行楽を兼ねた人々が、関東一円より訪れるようになり、現在に至っています。

大山の歴史的な伝承を記したものに、『大山寺縁起』があります。それらによると、大山は、天平勝宝4年(752)に東大寺別当の良弁僧正が登頂し開山したとされます。主神は山体の靈力の神格化された大山祇大神で、大山という名の由来になっており、脇神は風雨雷電を司る大雷神と水を司る高麗神です。また大山石尊とも呼ばれるように、巨石が御神体であるとも言われています。

2. 江戸庶民の大山詣

江戸時代、一般庶民は、商用や寺社参詣、訴訟などの限られた目的の旅しか許されていませんでしたが、中期以降は寺社参詣を兼ねた物見遊山の旅が次第に増えていきます。江戸の庶民も、江ノ島・鎌倉・相州大山、富士山、成田山さらには一生に一度の贅沢のようにして伊勢参りなどに出かけるようになりました。その中でも特に人気の高かったのが、大山詣でした。文化・文政・天保期にはそのピークを迎えています。江戸では、招福除災の現世利益的な傾向が強く、雨に因んで水に関係の深い職業のである火消しや鳶、あるいは石尊に因んで刀鍛冶や大工などの職人の講中が多かったです。

参詣の時期は、旧暦6月27日から7月17日までが

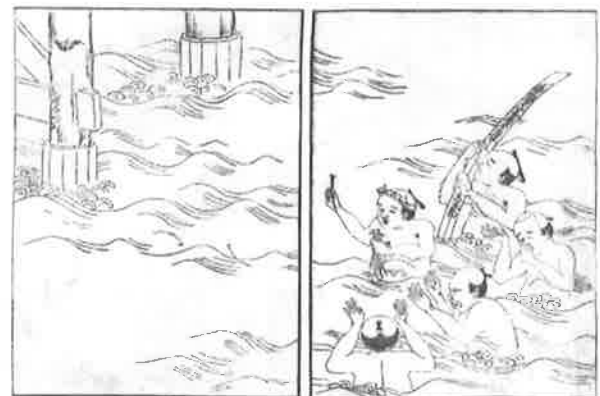
賑わい、その期間に限り山頂の石尊社の登拝が許されました。それ以外の時期は中腹の不動堂まででした。『東都歳事記』(齊藤月岑著、天保9年・1838)の六月廿六日には、当時の大山詣について記されているので、その一部を抜粋してみます。

・相州大山参詣の輩廿五日の頃より江戸を立つ 江戸并に近国近在よりの参詣夥し。詣人木太刀を神前へ納、又余人の納めたるを持帰りと守とす。小きは七八寸、大なるは丈余に及ぶ。

・石尊垢離取 大山参詣の者、大川に出て垢離を取、後禪定す。又重き病ある時は、近隣の者川にひたりて、当社を祈る。手毎にわらしべを持て、高声に祈念し、水中に投ず。流るゝを以てよしとし、たゞよふを以てあしとすとなん。崔下庵云、さんげさんげ六こんざいしやう、おしめにはつだい、こんがうどうじ、大山大聖不動明王、石尊大権現、大天狗小天狗といふ文を唱ふる事、さんげさんげは懺悔懺悔なり。ろくこんざいしやうは六根罪障なり。おしめにはつだいは、大峯八大なり。ことごとく誤れども、信の心をもって納受し給ふならん。この事中人以下のわざにして、以上の人はなしといへり。

このように、江戸で大山詣をする者は、両国橋東の垢離場で垢離をとり、「懺悔懺悔、六根清浄」の掛け声を唱えて、木太刀を持って参詣しました。『当世座持話』(西郷吾友、明和3年・1766)にはその様子が描かれています。

垢離とは、神事にあたって身心を浄化することで、神仏に願掛けしたり靈山に登拝したりする時にも行なっていました。垢離の際の藁しべは、一人一人の祈願が込められており、それを投じてそれらの祈願や旅の吉凶



『当世座持話』西郷吾友作

を占いました。また、登拝者の手にしている木太刀には、墨書きや掘りで「奉納大山石尊大権現大天狗小天狗請願成就」などと書かれており、人々はこれを持って参詣し、神前に奉納されている別の木太刀を拝受して持ち帰りました。この木太刀については、梵天ぼんてんの変形とする見方もあります。梵天とは修験者の祭具ですが、この木太刀にも祓除けの役割があると言われていいます。また、木太刀は神田の義広が作ることで知られていました。

江戸では、旧暦の五月以降に、梵天祭や川開きなどの行事が行なわれましたが、大山詣もそうした除災・除疫の一つとして考えることが出来そうです。隅田川で、舟遊びの人々と大山詣での垢離取りの人々が入り乱れ、声がかき消される様子を表した川柳もあります。

・屋根船の歌千垢離につぶされる(『柳多留』二十篇)

3. 行きは大山道、帰りは東海道

江戸から大山までの道で一般的なのは、東海道と矢倉沢往還やぐらさわおうかんでした。大山街道と言われるのは、後者のコースです。現在の国道246号線沿いの道にあたります。神田明神に参ってから赤坂、三軒茶屋、二子の渡し、長津田、伊勢原に行く、約18里(70km)の道のりで、途中一泊しました。そして、宿坊で一泊し、早朝から山に登りました。

帰りは、藤沢に出て、江ノ島・鎌倉を見物してから東海道を通るコースや、さらに小田原や箱根、富士山にまで足をのばすコースなどもありました。

4. 人気の背景

大山をはじめ、鎌倉・江ノ島、金沢八景、箱根は、江戸からの距離が手頃であり、また東海道などの幹線道路の近辺に位置していたことなどから、江戸庶民が盛んに訪れるようになりました。

しかし、これらの地が人気を呼んだのは、単に立地

的な要因だけではありません。例えば、いずれも中古以来の歴史や伝統を要している場所だったことも魅力の一つでした。

大山詣は、特に富士山や江ノ島とセットで登拝することがよいとされました。これは、大山の祭神を男神(大山祇大神)とするのに対して、富士山このはなさくやひめの木花開耶姫を女神とし、片参りを忌んだことから広まりました。

余談になりますが、富岡八幡宮(江東区富岡1)にあった富士塚は『御府内備考』続編によると「石尊山」とされています。石尊山は大山のことと思われるが、富士塚との関わりはわかっていません。

富士山のかわり女神である江ノ島の弁財天に参ることも好まれました。

・石尊で鶴より亀はよく見へる(『川柳評安七天』)

大山の山頂から眺めると鎌倉の鶴岡八幡宮よりも金亀山弁財天の江ノ島の方がよく見えるということですが、帰りにでも寄るつもりなののでしょうか。

また、帰りの道中の精進落として、懺悔をしたことなどは忘れてしまって、羽目を外してしまうことは、落語の「大山詣り」でもお馴染みです。

そして、大山詣を広め、人気を支えた背景には、御師おしと呼ばれる宗教者の活動をあげることができます。御師たちの布教活動により、大山山麓の大山講が江戸をはじめ関東一円へと発展していったのです。

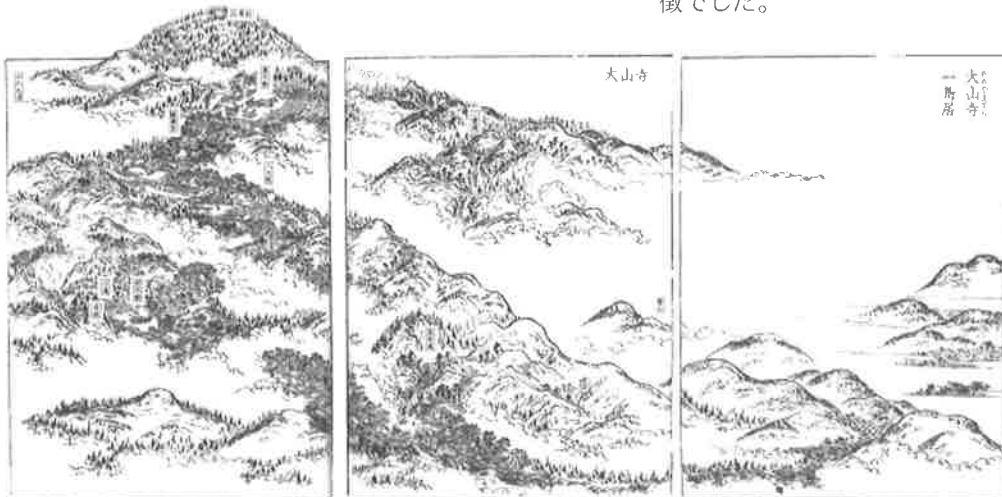
ところで、大山詣は、俄かに思い立って突発的に行くことがありました。しかもその理由の信仰心とは限らなかったことが、次のような句からわかります。

・しよせん足りない大山さして行き(『柳多留』十七篇)

江戸時代の決算期が盆と暮れだったため、借金取りから逃れるための大山詣です。

・石尊は賭場からすぐに思ひ立ち(『柳多留』五篇)

こちらは、博打で負けて逃げるようにして行ったのでしょう。こんなことが許されていたのも大山詣の特徴でした。



『東海道名所図会』
寛政9年(1797)

本文中には「毎歳六月二十七日より、七月十七日まで参詣を免す。江戸および近国近郷群参すること夥し。道中大いに賑わう。常は本堂の傍らなる中門を閉じて登山なし。」とある。